精神の解放と自己表現

空腹に悩ませられながらも、いまだ乏しい書物をむさぼるように読み、精神の飢えをいやそうとした母校の若者たち。彼らは次第に読書だけでは満足しなくなり、青春の精神的エネルギーをさまざまな媒体を通じて表現しはじめた。

終戦はわが国に混乱と貧困をもたらしたが、同時に数々の光明をも与えた。その最大のものは、精神活動の自由が保障されたことであった。軍国主義・全体主義の重圧がなくなり、平和主義・自由主義の世の中になった事実に、若者たちはめまいのするような解放感を味わった。

小説や詩をてがける者がかなりあって、文芸誌『東北文庫』の懸賞小説に応募して一位をとったり、詩集を出版したりする生徒がいた。「岩手日報」歌壇の常連もいた。

昭和二二年には、五年生の有志数人によって初めての校内新聞が発行された。現在の石桜新

聞のルーツとも言える、記念すべき校内新聞である。論説に西在家寛、坂井修治、編集台博見、山口謹一（後、徳治郎）、経理・販売佐久間和夫（いずれも旧18回生）というスタッフだった。巻頭言に佐々木校長の寄稿文を掲げ、文化部・体育部の動静や教師のエピソードを紹介し、連載小説まである校内新聞で、ガリ版刷りながら有料で販売した。不安と期待のうちに刷り上げた第一号はたちまち売り切れ、七月三日の第一号に次いで、九月二日に第二号、九月二二日に第三号、一二月六日に第四号を発行、第四号からは名称を「石桜新聞」と改めた。

同じ二二年には二月の創立記念式のあと学生芸能祭を開催したのに、わずか三カ月後の五月にもまた芸能祭を開いている。みんな娯楽に飢えていたし、何かでバカ騒ぎをしたい気分だった。ちなみにこの年の運動会は予算がなくて実施困難な状態だったが、それではというわけで一人一〇円ずつを出し合い、強行することに決めた。しかし当日雨が降り、結局流れてしまった。このような芸能祭あたりをきっかけとして、昭和二三年に演劇部が創設された。ちょうどそのころ、工専と医専の同好の士が集まり、高専演劇連盟を結成して県公会堂で公演した。

これに刺激された市内各中学の演劇部員が、岩中演劇部をリーダーとする盛岡市中等学校演劇連盟を結成し、第一回の発表会としてトリーヌ作のフランス近代劇「署長さんはお人好し」を上演することにした。女優がいなくては、と岩手高女に出演交渉したが断られ、やむなく男だけで演じる腹をかためた。発表会直前は学校に合宿して練習に励んだが、電力不足の世相とあって毎晩のように断続的な停電に見舞われ、ろうそくに頼らざるをえなかった。食べ物と言えばスイトンであった。そんな苦労が実って、第一回の発表会は大成功を収め、「岩手日報」紙上で演劇評論家の細越広人から絶賛された。また校内で開かれた芸能祭では菊池寛の「父帰る」に取り組み、これも拍手喝采を浴びた。

部員はほとんど素人ばかりであったが、舞台を通じて自己を表現したいという情熱に全員が燃えていた。そのためには、疎開以来盛岡に住んでいた中央の演劇人を訪ねて積極的に教えを請う労をも厭わなかった。こうして、盛岡の演劇界に岩中ありとの声を高めたのである。